

<対人関係に関する考察>

中央値以上群と困窮度Ⅰ群間の差が大きい項目に着目し分析結果を以下にまとめる。子どもが放課後に過ごす場所では、中央値以上群は困窮度Ⅰ群と比べ、「塾」(44.2%対25.1%)と「習いごと」(40.3%対25.5%)の利用が15ポイント以上高くなっている一方、困窮度Ⅰ群は中央値以上群と比べ、「学校(クラブ活動・部活動など)」(43.3%対36.5%)の利用が5ポイント以上高くなっている。子どもが「放課後を一緒に過ごす人」では、中央値以上群は困窮度Ⅰ群と比べ、「おうちの大人の人」(64.6%対58.6%)、「おうちの人以外の大人」(28.1%対19.0%)が5ポイント以上高くなっている。毎日の生活で楽しいことでは、中央値以上群は困窮度Ⅰ群と比べ、「学校生活やクラブ活動・部活動に参加しているとき」(58.0%対47.5%)が10ポイント以上、「ともだちと一緒に過ごしているとき」(82.4%対77.6%)、「今、住んでいる地域の行事に参加しているとき」(18.2%対9.5%)、「塾や習いごとで過ごしているとき」(27.9%対21.3%)が5ポイント以上高くなっている。一方、悩んでいることでは、困窮度Ⅰ群は中央値以上群と比べ、「自分のこと(外見や体型など)」(22.8%対15.6%)、「学校や勉強のこと」(23.6%対18.0%)が5ポイント以上高くなっている。また、子どもの自己効力感では、中央値以上群は困窮度Ⅰ群よりも高く(平均点8.62対8.09)、放課後一人で過ごさない子どもは過ごす子どもよりも高くなっている(平均点8.61対7.95)。これらの結果から、経済状況によって、子どもの教育的な活動へのアクセス、家族以外の社会交流や人間関係を築く機会の減少だけでなく、子どもの自己効力感にも影響を及ぼす可能性があることが示唆される。

子どもが放課後や休日に自分や友達の家以外で利用した場所では、困窮度Ⅰ群は中央値以上群と比べ、子どもの居場所を「利用したことがある」(21.2%対14.0%)が5ポイント以上高く、さらに「平日の夜や休日に過ごすことができる場所(学童保育など)」(29.3%対23.6%)、「昼食や夕食、お弁当を無料か安い料金で食べることができる場所(子ども食堂など)」(11.8%対7.2%)、「勉強や無料か安い料金でみてる場所」(8.7%対3.2%)で5ポイント以上高くなっている。嫌なことや悩んでいるときの相談相手は、自分が世話をしている人がいる子ども群はいない群と比べ、「きょうだい」(18.6%対16.5%)、「学校の先生」(21.7%対18.7%)が高く、「平日の夜や休日を過ごすことができる場所(学童保育など)」(28.8%対25.2%)、「昼食や夕食、お弁当を無料か安い料金で食べることができる場所(子ども食堂など)」(12.3%対8.0%)、「勉強を無料か安い料金でみてる場所」(9.7%対4.3%)、「何でも相談できる場所」(5.0%対2.3%)を利用している割合が高くなっている。これらの結果から、経済的困難な家庭や子どもが家族の世話を担っているケースでは、周りの支えが重要であり、社会的支援を必要としていることが示唆される。

自分が世話をしていることの影響では、ほぼ毎日群は1か月に数日群と比べ、「おうちの人と話したり遊んだりすることが増える」(45.3%対17.6%)が25ポイント以上、「家の中で気持ちよく過ごすことができる」(41.4%対23.5%)が15ポイント以上、「おうちの人健康に過ごすことができる」(23.6%対11.8%)、「『お世話』にやりがいを感じる」(34.0%対20.6%)、「いらいらしやすい」(20.2%対8.8%)が10ポイント以上高くなっている。悩んでいることでは、自分が世話をしている人がいる子ども群はいない群と比べ、「学校や勉強のこと」(27.2%対18.8%)が5ポイント以上、「おうちのこと」(8.4%対5.2%)、「自分のこと(外見や体型など)」(20.4%対16.5%)、が高くなっている。これらの結果から、自分が世話をしている人がいる子どもは家族との対話や家族のことを考える時間が多いが、社会と関わる時間が制限されストレスを抱える傾向にあることが示唆される。

本当に困ったときや悩みがあるときの保護者の相談相手・相談先では、子どもの居場所を利用したことがある群はない群と比べ、「知人や友人」(58.1%対52.7%)、「学校の先生やスクールカ

ウンセラー、スクールソーシャルワーカー」(14.3%対9.2%)が5ポイント以上、「きょうだい・その他の親戚」(37.9%対33.9%)、「配偶者・パートナーの親」(24.6%対21.4%)、「医療機関の医師や看護師」(7.6%対4.4%)、「公的機関や役所の相談員」(5.9%対3.5%)、「学童保育の指導員」(2.9%対0.7%)が高くなっている。これらの結果から、子どもの居場所が様々な専門家や機関との連携を可能にしており、総合的なサポート体制として機能していると考えられる。

※参照データについては一部資料編に掲載

Ⅲ 総合考察

本報告書における「子どもの貧困」概念の捉え方であるが、基本的に、2016年度の調査で扱った貧困概念に基づいている。簡単に述べると、子どもの貧困を相対的貧困で捉えた上で、①所得や資産などの経済的資本、②健康や教育などのヒューマン・キャピタル、③つながりやネットワークなどのソーシャル・キャピタルの3つのキャピタルの欠如を枠組みとしている。この数年で、「子どもの貧困」「相対的貧困」概念も十分に知られるようになったことから、詳細な説明はここでは割愛するが、山野則子編著（2019）を参照されたい。

次に、総合考察においては大阪府および共同実施市町で実施した調査結果に基づく数値で検討を行う（府が直接実施した調査は25市町村分であり、前回比較は2016年度実施の30市町村分で行う）。各ページにはグラフコメントやクロス分析を考察したセクションコメント（経済状況、雇用、健康、家庭状況制度、家庭生活と学習、対人関係）を記載している。総合考察においては、これらセクションコメントを踏まえ、2016年度と比較し変化のあるものや新規項目などを中心に記載している（一部、要望により同傾向でも記載あり）。単純集計はセクションコメントに出てこないため、可能な限り数字を入れて説明する。

1）大阪府共同実施調査の意義

本市の調査のみならず大阪府内43自治体と共同で調査を実施して把握したことは、合計の回答者数の多さにおいても都道府県レベルで域内すべての自治体の対象者が入っている点においても、意義がある。その上で、大阪府内全自治体の結果は、豊中市の調査結果の傾向を裏付けるものであった。これは無作為抽出であっても全体と比較してみることで、傾向の把握が可能であり、信頼性があることを示すものとなった。

本報告では、すべての項目に大阪府内全自治体のグラフを入れることで、結果をわかりやすくしている。本調査は、子どもの貧困対策の評価につながる基礎調査である。

2）単純集計

<経済面・家庭状況制度面>

豊中市では、2016年度の前回調査（以後、前回調査とする）では20.1%の世帯が赤字であったが、今回はやや低くなり、17.4%であった。この数値は、前は、中2の世帯が小5の世帯よりも高くなっており、3.6ポイントの差があったが、今回は両者がほぼ同じ数値（17.8%対17.1%）となっている。この結果から、前回明らかにした、クラブや塾など小学生よりも中学生の方が家計を圧迫していることに対応がなされていることが示唆された。また、子どものための貯蓄をしたいができない状態が、前回28.3%が今回24.7%であった。持ち家率は前回67.9%だったのが、今回74.5%とやや上がった結果である。持ち家率の上昇については、コロナも含め災害が多発することで持ち家への価値観が変化してきたかとも考えられるが、家庭の経済状況の改善も一因と考えられる。経済的な理由で経験できなかったこと（はく奪項目）について、生活における食費の切りつめやレジャーを控えるなどの項目は、2016年に比較して該当率が下がっている。それに呼応して、どれにもあてはまらないという回答は前回30.0%、今回34.1%とやや高くなっている。以上より、家計の赤字の数も減り、子どものための貯蓄や持ち家率の上昇等、全体を見たときに、2016年度から少しではあるが、好転しているようにとらえられる。

経済的理由による子どもに関する経験（子どものはく奪）に関しては、「子どもを医療機関に

受診させることができなかった」が前回1.7%、今回0.3%である。この結果について、特に子どものいる世帯における医療面での施策が、豊中市においても確実に実施され、その成果が出たものと思われる。この他、「子どもに新しい服や靴を買うことができなかった」が前回8.2%、今回6.8%、「子どもを習い事に通わすことができなかった」が前回10.3%、今回9.1%、「子どもを学習塾に通わすことができなかった」が前回11.0%、今回9.8%と減少しているが、ほかは残念ながら好転がみられない（「子どものための本や絵本が買えなかった」が前回3.9%、今回3.9%、「子どもを学校のクラブ活動に参加させられなかった」前回0.6%、今回0.4%など）。

また、子どもが持っているものや使えるものを見ると、本は前回83.7%、今回77.2%、子ども部屋は前回76.9%、今回72.6%、自転車が前回92.5%、今回86.7%と下がっているものが多い中、極端に上がったのは、スマートフォンやタブレット機器は前回52.0%、今回79.4%であり、これらは市立小中学校児童生徒への一人一台のタブレット端末の配備の成果と思われる。

以上から、家計の状況は少し改善がみられ、子どもを医療機関に受診させることができなかった割合も減少するなど、一部ではあるが家計の改善を子どもに回す余裕もみられる。したがって今後は、経済的理由で子どもの活動が制限されたことによりできなかった経験（上記に挙げたようなこと）がどの家庭でも実現できるような、さらなる方策が非常に重要である。

前回調査では、養育費の取り決めについては設問を入れていなかったため、豊中市での正確な比較はできないが、今回、養育費の取り決めをして受け取っているのは39.4%と約4割であった。反面、養育費を取り決めていないが、受け取っていないのは18.1%と約2割であった。2016年度全国ひとり親世帯等調査（厚生労働省2017）では、ひとり親家庭のうち養育費についての取決めをしている割合が母子世帯で62.9%、父子世帯で20.8%、そのうちひとり親家庭で養育費を受け取っていない子どもの割合が、母子世帯69.8%、父子世帯90.2%という値であり、今回の結果は、養育費関連の施策の成果はあったのではないかと推測される。

<雇用・家庭状況（制度等）>

保護者の就業状況については、今回調査は前回調査と比べて、父親より母親の就業状況でより大きな変化が確認できる。何らかの仕事をしている母親は、前回71.6%、今回80.4%と約10ポイント上昇している。そのなかで、正規職員が前回15.4%、今回25.5%で約10ポイント増えている。同時に就業状況に影響があると考えられる学歴についても、母親の学歴を見ると、高校卒業が前回18.6%、今回13.4%で約5ポイント減少、大学卒業が前回29.3%、今回40.5%、約10ポイント上昇した。雇用に関する結果は、世の中の人手不足と相まって働く人が増加したことにより、可処分所得も増加したことと関連するであろう。社会の認識の変化や政策による変化があったのではないかと考えられる。子どもの貧困の世論が広まり、各所に出された政策の効果と考えられよう。

支援制度の利用状況は、就学援助は前回12.8%、今回8.8%、児童扶養手当が前回9.8%、今回10.6%、生活保護が前回2.2%、今回0.5%であった。就学援助制度について、「利用したことがない」との回答が前回61.2%、今回82.8%とかなり増加しており、今回調査ではその理由を聞いているが、「自身が該当しない」が93.8%でほぼ皆がそう思っていることがわかった。この数値は、もっと受けることができる世帯があると思われるが、受けていないことを示唆している。前回も「あなたが受けることができる権利がある」メッセージを必要な人にどう届けるのか大きな課題であったが、改善には至っていない。各制度を正しく知らせ、他人ごとにせず、そこでのスティグマを無くし受けやすくする工夫がさらに必要である。

<健康・家庭生活・学習・対人関係>

まず、食事については「朝食を食べない」（週に1回も食べていない）が前回1.4%、今回1.7%とほぼ変わらない。食べない理由には「用意されていないから」が、前回2.9%、今回3.4%、「食べる習慣がない」が前回4.4%、今回9.1%と約5ポイント増加している。

家族と関わる設問は、前回調査と傾向はほぼ変わらなかった。放課後過ごす場所は、「友だちの家」が前回25.9%、今回19.8%、「学校（クラブ活動など）」が前回43.6%、今回37.9%と減っており、コロナの影響による社会的交流が減ったことからの可能性が考えられる。友人との関係性が薄れることは、孤立や孤独へ向かう懸念も生じる。

勉強に関しては、今回調査から「授業がわからなくなった時期」について調査し、小学生では3、4年生（55.4%）、中学生では1年生（51.0%）でつまづいていることがわかった。相談相手では、誰にも相談できない、相談したくないと感じている子どもは、前回14.3%、今回は9.7%と前回調査よりも減っている。前は身体や気持ちで気になること、今回は身体の状態で気になること、「この1週間の気持ちの状況」で気になることを聞いているため単純に比較はできないが、「特に気になるところがない」が前回25.5%、今回は38.0%（体調）、「やる気が起きない」において「そんなことはない」が30.8%であった。

悩みについては、前回調査と数値も傾向も変わらない。最も多いのが、「学校や勉強のこと」について「自分のこと（外見や体型のこと）」「進学・進路のこと」であった。

制度やサービスでいうと、子どもの居場所において、「平日の夜や休日過ごす居場所」の利用では小5が26.1%、中2が20.6%の子どもが利用したことがあり、「食事提供の居場所」は小5が10.0%、中2が7.0%、「学習支援の居場所」は小5が4.0%、中2が6.5%、「何でも相談できる場所」は、小5が2.8%、中2が2.7%の子どもが利用したことがあった。これらを併せた居場所の効果として「友だちの増加」が小学生で32.1%、中学生で34.3%、「生活の中に楽しみなことが増えた」は小5が14.2%、中2が8.1%、「気軽に話せる大人が増えた」は小5で14.6%、中2で6.4%という結果であった。このことは今後の展開に大きな意味をなすであろう。ただし、中学2年生は、友達が増えたと回答する反面、同じくらい「特に変化なし」（31.4%）と回答している。そのため、早期に居場所に繋ぎ、居場所が誰にとっても当たり前の選択肢にすることが望ましい。

「平日の夜や休日過ごせる居場所」以外に、利用したことがある居場所は「食事提供の居場所」8.6%、「学習支援の居場所」約5%、「何でも相談できる場所」は2.7%と少なくなり、将来の利用に関する積極的な利用希望も「食事提供の居場所」が小中合わせて15.9%、「学習支援の居場所」が小中合わせて13.1%になり、子どもたちの希望があるととらえられる。「放課後過ごす場所」において、「友だちの家」や「学校（クラブ活動など）」が減少していることと併せて、子どもたちに多くの選択肢を提供できる方がよいと考えられること、自分には関係ないと考ええる傾向があるかもしれないこと、などから居場所の充実とより自然な提供が望まれる。最後にヤングケアラーの項目である「家族に世話をしている人」がいるかどうかについては、厚生労働省の研究事業として実施された調査結果と比べると、小学生6.5%（日本総研2022）、中学生5.7%（MURC2021）という値よりはるかに高い、小5が19.2%、中2が10.9%であり、内容もきょうだいの世話が最も多く、小5は73.9%（小学6年生28.5%：日本総研2022）、中2が74.4%（中学生79.8%：MURC2021）である。家事は複数の質問にまたがっていることや複数回答可にしていることから単純に比較できないが、国の結果35.2%より高いと予想できる。時間をみると1時間以内が最も多く、定義のあいまいさが子どもに答えにくくさせていると思われる。今後、イギリスのように定義を明確にしていくことも検討を行うことが望ましい。

今回調査で保護者が身近にあるといいと思うことは、上位3つが「放課後や休日に勉強などができる場所を利用できること」37.0%、「無料で学習支援が受けられる場所」34.0%、「困っ

たときにご飯を無料または安価で自宅に届けてくれるサービス」28.5%であった。学習に関して特に身近にあるといいと考えていることがわかり、これらのサービスを利用している率の低さから、身近に届けられるような工夫が必要である。

3) クロス集計

各セクションコメントでは、2023年度の項目のみで確認してきたが、ここでは可能な限り前回調査と比較する。まず経済面では、できなかった経験（はく奪指標）として、2016年度も検討してきた項目から確認する。

まずは、経済面から確認する。「家賃や住宅ローンの支払いが滞ったことがある」「電話（固定・携帯）など通信料の支払いが滞ったことがある」「国民年金の支払いが滞ったことがある」などの項目では前回調査よりも減少、特に困窮度Ⅰ群においては半減に近い減少がみられる。ただし、「生活の見通しがたたなくて不安になったことがある」の減少は大きくはなく、将来への不安感の解消にまで至っていない。子どものはく奪に関して、「お子さんの進路を変更した」は2016年度と比較して増加している。これは、コロナ禍となったこともあり、経済的リスクのしわ寄せが子どもに向かった可能性があるが、避けなければならないことであり、対策を講ずべきである。また、家計を住居の所有状況別にみると、「府営・市営の住宅」において、家計が赤字の世帯の割合が約4～6割（前回61.2%、今回38.7%）、子どものために「貯蓄したいが、できていない」割合が約4～7割（前回71.6%、今回45.2%）と他と比較して家計の厳しさが示されたと言える。

支援制度に関しては、まず就学援助制度は、申請すれば利用できるはずの困窮度Ⅰ群であっても利用したことがない人が、前回調査では16.8%であったが、今回調査では36.7%と増加している。現在利用している人をみても、前回調査57.1%だったところ今回調査は50.2%と減少している。児童扶養手当（ひとり親）も困窮度Ⅰ群で利用したことがない人が、前回調査8.5%から今回調査14.0%と約5ポイント増加している。「生活保護制度」について、困窮度Ⅰ群において「利用している」が前回調査9.0%から今回調査2.9%と約6ポイント減少しており、やはり利用は全体的に少なくなっている。これら設問の文言（例「受けたことがある」→「利用したことがある」など）の違いはあるものの、困窮度Ⅰ群にとって、制度利用は十分に進んでおらず、さらに厳しい状況となったとも推察できる。

子育て世帯生活支援特別給付金の利用状況は、本調査において全体で3.9%、新型コロナウイルス感染症に伴う生活福祉資金は0.7%である。全国レベルのデータを見ると、2020年コロナ発生後の10月の調査（厚生労働科学特別研究）において、収入200万未満の世帯で利用率は35.6%（山野研究室2021）である。これらの数値を直接比較することはできないが、いずれにおいても割合の低さから、2016年以降子どもの貧困が周知されるようになり、コロナ禍となって、さらに支援制度の広がりや周知が今まで以上になされたが、大阪府においてもその活用が広がりきらなかったということが考えられ、今後利用が減少した要因を探る必要がある。

10代で親になった世帯の生活の厳しさは、前回調査と同様であり、たとえば母親の最終学歴について初めて親となった年齢別では、中卒（「中学校卒業」および「高等学校中途退学」）が半数近く、他の年齢群に比べて高い割合を示している。また、就労状況において正規社員の割合が、他の年齢群と比べて低くなっている。出産などによって学業を中断せざるを得なかった10代への教育支援や就業支援もさることながら、そもそもの予防的支援として、自分を大切にすることや将来を見えるような教育的支援が望まれる。例えば、小学生から高校生まで、性教育含む生きる教育（西澤・西岡ほか2022）の積極的な導入を進めるべきである。またスウェーデンで行われる、実際の社会問題と向き合い、制度を知り選択できる力を養う社会科授業の実施など、思い切っ

た根本的な教育改革が必要である。

雇用に関しては、質問形態が違うため単純に前回調査と比較できないが、非正規雇用の方が、困窮度が増すことや、最終学歴が低いほど困窮度Ⅰ群に占める割合が高くなる傾向は前回調査と同じである。世帯構成と就労状況の関係をみると、ふたり親世帯と比べて、母子世帯では非正規雇用の割合が前回調査31.6%、今回調査29.2%とやや低くなった。また困窮度Ⅰ群では、「非正規」群が高くなっている点も変わらない。基本的に、さらにひとり親世帯への重点支援を検討すべきである。

健康に関する傾向は、前回調査からほぼ変わらない。つまり困窮度が増すほど身体面、精神面不調が高くなる。セクションコメントで述べてきたように、毎日の規則正しい朝食・昼食摂取が、保護者と子どもがよりよい関係となって、子どもの自己効力感を高める可能性があり、自己肯定感や将来の夢や目標があるほど、日常生活の中で元気に過ごしているという傾向があることから、基本的な生活習慣を維持できるような取り組み、将来の夢や目標が持てるような取り組みの工夫が必要である。

家庭生活や学習に関する傾向も前回調査と変わらない。セクションコメントで述べてきたように、経済状況が保護者と子どもの間のコミュニケーションや子どもの生活リズムに影響を及ぼしうると考えられる。経済的に困難な世帯の子どもは、通学が難しくなっているほか、学習習慣や家庭内での文化活動の習慣がなく、結果的に学習理解が不十分となっている可能性が示された。また、子ども自身も保護者も大学以上の高いレベルの教育を望まなくなっており、これは経済的事情と学習理解の低さのいずれもが要因となっている可能性がある。子どもの将来に関して、困窮度Ⅰ群と中央値以上群の差は前回調査から変わっていない。つまり、将来への希望が持つことができている状況に。

生活習慣や学習習慣・読書習慣の形成に影響が出ている可能性が示唆された。また、生活習慣が身につけていないと遅刻につながり、学習理解に影響が出ている可能性がある。こうしたことから学習習慣と家庭状況は大きく関係するため、横断的に判断できて支援に繋ぐような、例えば家庭学習を補完するためにも、学習支援や学校での少し先輩である就学前児童なら小学生、小学生なら中学生、中学生なら高校生、など年齢の近い年上の子ども・若者を各所で導入する仕組みを作ったり、校内でサポートを展開するメンターの導入などが望ましい。(イギリスやアメリカで活用されるメンター制度など)

対人関係においては前回調査と傾向について大きくは変わらない。ただし、放課後過ごす人の回答は「学校以外の友だち」が今回、困窮度Ⅰ群が6.5%、中央値以上群が10.8%であり、前回の差(困窮度Ⅰ群が7.9%と中央値以上群が10.5%)に比べてわずかに差が広がった。また場所としても前回は困窮度Ⅰ群対中央値以上群ではコンビニ1.8%対1.7%、ゲームセンター1.5%対0.8%が特徴的で困窮度Ⅰ群の方が高かったが、今回は同じく、ゲームセンター1.5%対0.7%、一方、コンビニ3.4%対4.7%とやや逆転した。塾や習い事は、前回は困窮度Ⅰ群対中央値以上群では塾19.1%対43.0%、習い事27.3%対42.7%が、今回同じく塾25.1%対44.2%、習い事25.5%対40.3%となった。

経済状況によって、子どもの教育的な活動へのアクセス、家族以外の社会的交流や人間関係を築く機会が制限されるだけでなく、子どもの自己効力感にも影響を及ぼす可能性があることが示唆された。また、経済的困難な家庭では、子どもが家族の世話を担っているケースが多く、家族の世話をしている子どもにとって、周りの支えが重要であり、社会的支援を必要としていることが示唆された。経済状況や世帯構成によって保護者の相談相手が異なり、とくに困難な経済状況にある世帯や特定の世帯構成の保護者が支えや相談相手の不足を経験していることが示された。

最後に、子どもが保護者以外に話せる機会が必要である。しかし、家庭と学校しかソーシャル

キャピタルを持たない子どもたちにとって、今回の調査において、「おうちの人に関する悩み」は「おうちの人」と「学校の友だち」に話しにくいという結果であった。これは、ますます経済的に厳しい子どもたちを孤立させ、ソーシャルキャピタルを欠如させてしまう。おうちの人や学校の友だちに相談すること自体難しいと考えられるが、おうちの人や友だちに話しにくいという今回の結果から、自然と話せるような場や人材を確保し、すべての子どもが自然に通う、学校から自然に構えずに参加できる、流れるような仕組みを創設または充実させることが望ましい。

まとめ

今回の調査結果から、子どもの貧困に関する対策の結果として、親の就労や学歴、所得状況は改善がみられ、中央値は上昇する結果であった。これは2021年度の厚生労働省の国民生活基礎調査の結果をみても同様の傾向である。

しかし、その分が子どもに回っておらず、物価高の影響等々考えられる。肝心の困窮度Ⅰ群の世帯あるいは子どもの状況の改善は見られず、悪化している部分もあった。このことは子どもの貧困を考える立場にとっては厳しい結果である。この解決には、国が縦割りを解消しようとして子ども家庭庁を設立し、データ連携等々新たな動きをしているなか、同様に教育や福祉という既存の枠組みを越えて、子どもをまんやかに実行できる体制や制度設計を早急に考えるべきである。以下のような覚悟ある対策をとる必要がある。

- ①経済面：母子世帯への支援や収入のアップを企業側が実行できるような施策が必要である。
- ②学習面：学校だけでなく、しかしすべての子どもが通う学校と連携した学びの保障を検討する。
方策として、コミュニティスクールや学習支援、無料塾の創設などの活用である。保護者のニーズのある無料塾は、例えば沖縄で導入している。貧困調査の結果から支援員を大々的に投入し、訪問による給付や支援の申請書書きのサポートなどの人的支援方策を実施した。そういう方法を検討する必要がある。あるいはそれをクラウドデータで行えるようなデータ連携と社会資源を選択できるよう可視化と自治体内でどこも部署でも所持するような共有化が必要である。
- ③無償化の対象にならない部活の費用などの補助を行う。塾代助成のような方策を検討し、かつ申請しなくても必要な人には使用できるよう、塾側に措置費のような形で配分する枠組みの提示や方策の提案を行う。
- ④価値の創造：教育の力はすべての子どもに影響することが出来る。年齢に応じて子どもの人権や生きる価値など人間尊重の理念から獲得できるような学びとその方法を導入する。小学1年生から体験的に教育を受ける生きる教育（西澤・西岡2022）やブレインストーミングのように子どもたちと対話で進めるフィンランドの教育（北川2005）、実際的な生活課題から制度やサービス、権利に関して体験的に学ぶスウェーデンの社会科（リンドクウィスト・ウェステル1997）のように、その年齢に合わせて体験型であり、自身の意見を出し、周りの意見を聞きながら進めるレクチャー型ではない教育の進め方を根本から検討すべきである。そのことによって10代の妊娠やいじめ、ヤングケアラーなど家庭状況を抱えるようになってからも早期にSOSが出せたり、自身で支援を選択できる力を養うことができる。
- ⑤地域資源：支援の場所を周知することである。自治体のパンフなど見やすい形で拡充する必要がある。子ども食堂に限らず、様々な機能（駄菓子屋や公園などほっと寄れるような場を使ったりたまり場など）を持つ居場所や体験交流できる場かつ子どもが自力で行ける小学校区に必要である。学校が場所を開放するのがベストである。その場所が子どもにとっても親にとってもわかりやすく、行きやすい場所にあり、選択肢が増え、可視化し利用しやすくする必要がある。相談機関を増やしても子どもや親からの相談の数値は決して上がらず、居場所などの場の方が

有効である。

- ⑥連携の考え方：連携とは個人情報を共有しなければならないわけではない。個人情報は把握しないまま連携することが重要である。これが社会資源を知らない教師と個人情報を持ってない地域の居場所の新しい連携の方法であり、これらを周知徹底させることである。
- ⑦すべての子どもを視野に入れ、そこから自然につながる仕組みなど、今までの縦割りとは次元の違う支援の仕組みが必要である。
- ⑧社会福祉協議会など居場所の中間支援を行う機関の役割を明確化し、機能的に促進させる。社会教育分野が持つ公民館や図書館や博物館なども場であり、さらなる協働を明確にする。(子ども食堂等居場所の活動団体が無料で入れる、利用できるなど)
- ⑨全数からの仕組み：必要な子どもが確実に発見され自然につながるためには、スクリーニングから繋ぐ機能まで持った、例えば文部科学省推奨(2020)のYOSSスクリーニング(山野研究室2021)の仕組みが必要である。今回の調査で2016年からの比較によってアウトリーチでは乗り越えられなかった壁が明かになった。相談ではなく、自然に伴走する支援を厳しい家庭の保護者や子どもたちは求めていることがわかった。必要な子どもを早期に発見し、伴奏しながら、必要な制度や仕組みを紹介し、利用を増やすことで生活の改善をはかることと、伴奏することで子どもや保護者本人の力をアップさせ、資源を活用できるようにする機能が必要である。
- ⑩システム化：洩れなく持続可能に巡回させるためには、人に頼るだけでなく、福祉と学校のデータ連携を推奨し、地域資源の可視化のためにクラウド化することも考慮すべき点である。クラウドによっていち早く支援場所や居場所が学校にもすぐにわかり、地域活動と支援の必要な子どもを結び、支援提供を展開する必要がある。
- ⑪人材：これら学校においてすべての子どもの検討、発見から支援に繋ぐ校内の体制作りができる人材養成に力を入れる必要がある。スキルを取得する訓練講座の予算化や新たな認定制度になる子ども家庭ソーシャルワーカー養成制度の活用などである。
- ⑫その専門職の1つがスクールソーシャルワーカーである。各校に1名配置できるよう、正規職化への働きかけ、あるいは各自治体での正職化計画を立てる必要がある。
- ⑬法制化：これらは連携ではなく仕組み作りであり、制度化である。要項や規定を作成し、自治体や機関として動きやすいように作成すべきである。
- ⑭制度設計：デジタル化のために補助金や助成金を検討することも必要である。なぜなら、どこに必要な子どもが存在するのかわからない。データ連携することでどこに必要な子どもが存在し、様々な制度を活用してどうだったかを検証できるように作りこむことである。これらのシステム費用がベンダーロックにより莫大な金額がかかる課題がある。企業を巻き込むと同時に自治体や政府からクラウド化に向けた助成制度を創設する必要がある。

引用・参考文献

アーネ・リンドクウィスト&ヤン・ウェステル、川上 邦夫(翻訳)(1997)『あなた自身の社会：スウェーデンの中学教科書』新評論。

大阪府(2023)「大阪府子ども(子育て世帯)に対する食費支援事業(第2弾)」

(<https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/20980/00457638/2-9.pdf>)

大阪府立大学(2017)「大阪府子どもの生活実態調査」

北川達夫(2005)「図解フィンランド・メソッド入門」経済界。

- 厚生労働省 (2004) 「ワークシェアリング導入促進に関する秘訣集及びリーフレットについて」
(<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/06/h0630-2.html>)
- 厚生労働省 (2017) 「平成 28 年度 全国ひとり親世帯等調査結果報告」
(<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11923000-Kodomokateikyoku-Kateifukishika/0000190325.pdf>)
- 厚生労働省 (2022) 「2022 (令和 4) 年国民生活基礎調査の概況」
(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/index.html>)
- 柴田悠 (2016) 『子育て支援が日本を救う—政策効果の統計分析』 勁草書房.
- 内閣府 (2010) 「平成 21 年度インターネットによる子育て費用に関する調査」
(https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/cyousa21/net_hiyo/mokuji_pdf.html)
- 西澤哲・西岡加名恵ほか (2022) 『「『生きる』教育」：自己肯定感を育み, 自分と相手を大切に
する方法を学ぶ』 日本標準.
- 日本総研 (2022) 「令和 3 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業：ヤングケアラーの実態に
関する調査研究」 厚生労働省.
- 三菱 UFJ リサーチコンサルティング (株) (2021) 「令和 2 年度子ども・子育て支援推進調査研
究事業：ヤングケアラーの実態に関する調査研究」 厚生労働省.
- 文部科学省 (2023) 「令和 5 年度就学援助の実施状況」
(https://www.mext.go.jp/content/20210324-mxt_shuugaku-000013450_27.pdf)
- 文部科学省・山野研究室 (2020) 「スクリーニング活用ガイド」
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/_icsFiles/afieldfile/2020/03/27/20200327_mxt_kouhou02_2.pdf)
- 山野則子編著 (2019) 『子どもの貧困調査—子どもの生活に関する実態調査から見えてきたもの』
明石書店.
- 山野則子 (2018) 『学校プラットフォーム』 有斐閣.
- 山野則子研究室 (2021) 「コロナ禍における子どもへの影響と支援方策のための横断的研究 保護
者調査・子ども調査報告書」 厚生労働省.
- 山野則子研究室 (2021) 「スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの常勤化に向
けた調査研究」 文部科学省.
- 柳澤靖明・福島尚子 (2019) 『隠れ教育費：公立小中学校でかかるお金を徹底検証』 太郎次郎社
エディタス.
- UNESCO(2020) ‘International technical guidance on sexuality education: an evidence-
informed approach (jpn)’ (<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000374167>)

図表目次

図 1. 困窮度別に見た、経済的な理由による経験	183
図 2. 困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験	185
図 3. 困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるもの.....	187
図 4. 困窮度別に見た、経済的な理由による経験の該当数の平均.....	188
図 5. 困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験の該当数の平均.....	189
図 6. 困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるものの該当数の平均.....	190
図 7. 困窮度別に見た、世帯員の構成	191
図 8. 困窮度別に見た、世帯員の構成（2016 年度調査との比較）	192
図 9. 世帯構成別に見た、家計の状況	193
図 10. 困窮度別に見た、子どもの人数	194
図 11. 困窮度別に見た、住居形態	195
図 12. 困窮度別に見た、家計の状況	196
図 13. 困窮度別に見た、子どもの将来のための貯蓄状況	197
図 14. 困窮度別に見た、自分が世話をしている人の有無	198
図 15. 困窮度別に見た、就学援助の利用状況	201
図 16. 困窮度別に見た、就学援助の利用状況（2016 年度調査との比較）	202
図 17. 困窮度別に見た、児童扶養手当の利用状況（ひとり親世帯のみ）	203
図 18. 困窮度別に見た、児童扶養手当の利用状況（ひとり親世帯のみ）（2016 年度調査との比較）	204
図 19. 困窮度別に見た、生活保護の利用状況	205
図 20. 困窮度別に見た、生活保護の利用状況（2016 年度調査との比較）	206
図 21. 困窮度別に見た、離婚相手との養育費の取り決めや受け取り（ひとり親世帯のみ）	207
図 22. 困窮度別に見た、初めて親となった年齢	208
図 23. 困窮度別に見た、初めて親となった年齢（母親の回答者のみ）	209
図 24. 初めて親となった年齢別に見た、お母さんの最終学歴（母親の回答者のみ）	210
図 25. 初めて親となった年齢別に見た、お父さんの最終学歴（母親の回答者のみ）	211
図 26. 初めて親となった年齢別に見た、就労状況（母親の回答者のみ）	212
図 27. 初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること（母親の回答者のみ）	214
図 28. 初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当個数（母親の回答者のみ）	216
図 29. 住居形態別に見た、家計の状況	217
図 30. 住居形態別に見た、子どもの将来のための貯蓄状況	218
図 31. 子どもの居場所の利用経験別に見た、就学援助の利用状況.....	219
図 32. 子どもの居場所の利用経験別に見た、生活保護の利用状況.....	220
図 33. 子どもの居場所の利用経験別に見た、生活困窮者の自立支援相談窓口の利用状況	221
図 34. 子どもの居場所の利用経験別に見た、児童扶養手当の利用状況（ひとり親世帯のみ）	222
図 35. 子どもの居場所の利用経験別に見た、母子家庭等就業・自立支援センターの利用状況	223
図 36. 子どもの居場所の利用経験別に見た、低所得の子育て世帯に対する子育て世帯生活支援特別給付金の利用状況 ...	224
図 37. 子どもの居場所の利用経験別に見た、新型コロナウイルス感染症に伴う生活福祉資金（貸付金）の利用状況	225
図 38. 学校や学校の行事等の状況別に見た、就学援助の利用状況.....	227
図 39. 学校や学校の行事等の状況別に見た、生活保護の利用状況.....	229
図 40. 学校や学校の行事等の状況別に見た、生活困窮者の自立支援相談窓口の利用状況	231
図 41. 学校や学校の行事等の状況別に見た、児童扶養手当の利用状況（ひとり親世帯のみ）	233
図 42. 学校や学校の行事等の状況別に見た、母子家庭等就業・自立支援センターの利用状況	235
図 43. 学校や学校の行事等の状況別に見た、低所得の子育て世帯に対する子育て世帯生活支援特別給付金の利用状況 ...	237
図 44. 学校や学校の行事等の状況別に見た、新型コロナウイルス感染症に伴う生活福祉資金（貸付金）の利用状況	239
図 45. 身近にあるといいと思うこと別に見た、就学援助の利用状況.....	240
図 46. 身近にあるといいと思うこと別に見た、生活保護の利用状況.....	241
図 47. 身近にあるといいと思うこと別に見た、生活困窮者の自立支援相談窓口の利用状況	242
図 48. 身近にあるといいと思うこと別に見た、児童扶養手当の利用状況（ひとり親世帯のみ）	243
図 49. 身近にあるといいと思うこと別に見た、母子家庭等就業・自立支援センターの利用状況	244
図 50. 身近にあるといいと思うこと別に見た、低所得の子育て世帯に対する子育て世帯生活支援特別給付金の利用状況	245

図 51. 身近にあるといいと思うこと別に見た、新型コロナウイルス感染症に伴う生活福祉資金（貸付金）の利用状況 ...	246
図 52. 困窮度別に見た、就労状況	248
図 53. 困窮度別に見た、お母さんの最終学歴	249
図 54. 困窮度別に見た、お父さんの最終学歴	250
図 55. お母さんの最終学歴別に見た、就労状況	251
図 56. お父さんの最終学歴別に見た、就労状況	252
図 57. 世帯構成別に見た、就労状況	253
図 58. 就労状況別に見た、家計の状況	254
図 59. 困窮度別に見た、朝食の頻度	256
図 60. 就労状況別に見た、朝食の頻度	257
図 61. 朝食の頻度別に見た、子どもへの信頼度	258
図 62. 朝食の頻度別に見た、子どもとの会話頻度	259
図 63. 朝食の頻度別に見た、平日での子どもとの関わり時間	260
図 64. 朝食の頻度別に見た、休日での子どもとの関わり時間	261
図 65. 朝食の頻度別に見た、子どもの将来への期待度	262
図 66. 朝食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）	263
図 67. 休日の昼食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）	264
図 68. 困窮度別に見た、この一週間の気持ちの状況 ①楽しみにしていることがたくさんある	265
図 69. 困窮度別に見た、この一週間の気持ちの状況 ②遊びにでかけるのが好きだ	266
図 70. 困窮度別に見た、この一週間の気持ちの状況 ③元気いっぱいだ	267
図 71. 困窮度別に見た、この一週間の気持ちの状況 ④やろうと思ったことがうまくできる	268
図 72. 困窮度別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑤一人ぼっちのような気がする	269
図 73. 困窮度別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑥不安な気持ちになる	270
図 74. 困窮度別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑦まわりが気になる	271
図 75. 困窮度別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑧やる気が起きない	272
図 76. 困窮度別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑨いらいらする	273
図 77. 困窮度別に見た、自分の体の状態で気になること	275
図 78. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、この一週間の気持ちの状況 ①楽しみにしていることがたくさんある	276
図 79. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、この一週間の気持ちの状況 ②遊びにでかけるのが好きだ	277
図 80. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、この一週間の気持ちの状況 ③元気いっぱいだ	278
図 81. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、この一週間の気持ちの状況 ④やろうと思ったことがうまくできる	279
図 82. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑤一人ぼっちのような気がする	280
図 83. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑥不安な気持ちになる	281
図 84. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑦まわりが気になる	282
図 85. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑧やる気が起きない	283
図 86. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、この一週間の気持ちの状況 ⑨いらいらする	284
図 87. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、自分の体の状態で気になること	286
図 88. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること	288
図 89. 経済的な理由による経験の該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること	290
図 90. 就労状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当個数	291
図 91. 就労状況別に見た、支えてくれる人得点	292
図 92. 困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）	293
図 93. 困窮度別に見た、心の状態（将来に対して希望を持っているか）	294
図 94. 困窮度別に見た、心の状態（ストレスを発散できるものがあるか）	295
図 95. 困窮度別に見た、心の状態（自分が幸せだと思うか）	296
図 96. 困窮度別に見た、おうちの大人のひとと一緒に朝食を食べているか	299
図 97. 困窮度別に見た、おうちの大人のひとと一緒に夕食を食べているか	300
図 98. 困窮度別に見た、おうちの大人のひとに宿題（勉強）をみてもらうか	301
図 99. 困窮度別に見た、おうちの大人のひとと文化活動をするか	302
図 100. 困窮度別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がある日）	303
図 101. 困窮度別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がない日）	304

図 102.	困窮度別に見た、授業以外の読書時間	305
図 103.	困窮度別に見た、学校の勉強で気持ちに近いもの	306
図 104.	子ども部屋の有無別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間の平均値（学校がある日）	307
図 105.	子ども部屋の有無別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間の平均値（学校がない日）	308
図 106.	起床時間の規則性別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がある日）	309
図 107.	起床時間の規則性別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がない日）	310
図 108.	朝食の頻度別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がある日）	311
図 109.	朝食の頻度別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がない日）	312
図 110.	起床時間の規則性別に見た、授業以外の読書時間	313
図 111.	朝食の頻度別に見た、授業以外の読書時間	314
図 112.	困窮度別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がある日）と学習理解度の関連	315
図 113.	困窮度別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がない日）と学習理解度の関連	316
図 114.	学校への遅刻別に見た、子どもへの信頼度	317
図 115.	学校への遅刻別に見た、子どもとの会話頻度	318
図 116.	学校への遅刻別に見た、平日での子どもとの関わり時間	319
図 117.	学校への遅刻別に見た、休日での子どもとの関わり時間	320
図 118.	学校への遅刻別に見た、子どもの将来への期待度	321
図 119.	困窮度別に見た、子どもの将来への期待度	322
図 120.	困窮度別に見た、希望する進学先	323
図 121.	困窮度別に見た、希望する進学先（2016年度調査との比較）	324
図 122.	困窮度別に見た、子どもに希望する進学	325
図 123.	困窮度別に見た、学校への遅刻	326
図 124.	困窮度別に見た、子どもの通学状況	327
図 125.	学校への遅刻別に見た、おうちの大人のひとと一緒に朝食を食べているか	328
図 126.	学校への遅刻別に見た、おうちの大人のひとと一緒に夕食を食べているか	329
図 127.	学校への遅刻別に見た、おうちの大人のひとに宿題（勉強）をみてもらうか	330
図 128.	学校への遅刻別に見た、おうちの大人のひとと学校のできごとについて話すか	331
図 129.	学校への遅刻別に見た、おうちの大人のひとと遊んだり、体を動かしたりするか	332
図 130.	学校への遅刻別に見た、おうちの大人のひととニュースなど社会のできごとについて話すか	333
図 131.	学校への遅刻別に見た、おうちの大人のひとと文化活動をするか	334
図 132.	学校への遅刻別に見た、おうちの大人のひとと一緒に外出するか	335
図 133.	学校への遅刻別に見た、嫌なことや悩んでいること	337
図 134.	学校への遅刻別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当個数	338
図 135.	学校への遅刻別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）	339
図 136.	学校への遅刻別に見た、希望する進学先	340
図 137.	学校への遅刻別に見た、学校の勉強で気持ちに近いもの	341
図 138.	子どもの通学状況別に見た、嫌なことや悩んでいること	343
図 139.	子どもの通学状況別に見た、悩んだ時の対処を教えてくれる人のいない割合	344
図 140.	子どもの通学状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当個数	345
図 141.	子どもの通学状況別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）	346
図 142.	子どもの通学状況別に見た、希望する進学先	347
図 143.	困窮度別に見た、保護者が家にいる時間帯	348
図 144.	困窮度別に見た、子どもへの信頼度	349
図 145.	困窮度別に見た、子どもとの会話頻度	350
図 146.	困窮度別に見た、平日での子どもとの関わり時間	351
図 147.	困窮度別に見た、休日での子どもとの関わり時間	352
図 148.	自分が世話をしている人の有無別に見た、学校や学校の行事等の状況	354
図 149.	自分が世話をしている人の有無別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がある日）	355
図 150.	自分が世話をしている人の有無別に見た、授業時間以外の1日あたりの勉強時間（学校がない日）	356
図 151.	困窮度別に見た、放課後を過ごす場所	360
図 152.	困窮度別に見た、放課後を一緒に過ごす人	362

図 153. 困窮度別に見た、毎日の生活で楽しいこと	364
図 154. 困窮度別に見た、嫌なことや悩んでいること	366
図 155. 困窮度別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手.....	368
図 156. 困窮度別に見た、本当に困ったときや悩みがあるときの相談相手・相談先.....	370
図 157. 困窮度別に見た、本当に困ったときや悩みがあるときの相談相手・相談先（2016 年度調査との比較）	371
図 158. 世帯構成別に見た、本当に困ったときや悩みがあるときの相談相手・相談先がない割合	372
図 159. 世帯構成別に見た、本当に困ったときや悩みがあるときの相談相手・相談先がない割合（2016 年度調査との比較） ..	372
図 160. 困窮度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）	373
図 161. 子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかと、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）	374
図 162. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、おうちの手伝いをしているか.....	375
図 163. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、おうちの大人のひとに宿題（勉強）をみてもらうか	376
図 164. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、おうちの大人のひとと学校のできごとについて話すか	377
図 165. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、おうちの大人のひとと遊んだり、体を動かしたりするか	378
図 166. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、おうちの大人のひととニュースなど社会のできごとについて話すか.....	379
図 167. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、おうちの大人のひとと文化活動をするか.....	380
図 168. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、おうちの大人のひとと一緒に外出するか.....	381
図 169. 困窮度別に見た、平日の夜や休日を過ごすことができる場所.....	382
図 170. 困窮度別に見た、昼食や夕食、お弁当を無料か安い料金で食べることができる場所.....	383
図 171. 困窮度別に見た、勉強を無料か安い料金でみてくれる場所.....	384
図 172. 困窮度別に見た、何でも相談できる場所	385
図 173. 困窮度別に見た、子どもの居場所の利用経験	386
図 174. 平日の夜や休日を過ごすことができる場所別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手	388
図 175. 昼食や夕食、お弁当を無料か安い料金で食べることができる場所別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手	390
図 176. 勉強を無料か安い料金でみてくれる場所別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手	392
図 177. 何でも相談できる場所別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手.....	394
図 178. 自分が世話をしている人の有無別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手.....	396
図 179. 自分が世話をしている人の有無別に見た、平日の夜や休日を過ごすことができる場所	397
図 180. 自分が世話をしている人の有無別に見た、昼食や夕食、お弁当を無料か安い料金で食べることができる場所	398
図 181. 自分が世話をしている人の有無別に見た、勉強を無料か安い料金でみてくれる場所	399
図 182. 自分が世話をしている人の有無別に見た、何でも相談できる場所.....	400
図 183. 子どもの居場所の利用経験別に見た、本当に困ったときや悩みがあるときの相談相手・相談先	402
図 184. 学校や学校の行事等の状況別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手.....	404
図 185. 学校や学校の行事等の状況別に見た、平日の夜や休日を過ごすことができる場所.....	406
図 186. 学校や学校の行事等の状況別に見た、昼食や夕食、お弁当を無料か安い料金で食べることができる場所.....	408
図 187. 学校や学校の行事等の状況別に見た、勉強を無料か安い料金でみてくれる場所.....	410
図 188. 学校や学校の行事等の状況別に見た、何でも相談できる場所.....	412
図 189. 身近にあるといいと思うこと別に見た、平日の夜や休日を過ごすことができる場所	414
図 190. 身近にあるといいと思うこと別に見た、昼食や夕食、お弁当を無料か安い料金で食べることができる場所	416
図 191. 身近にあるといいと思うこと別に見た、勉強を無料か安い料金でみてくれる場所.....	418
図 192. 身近にあるといいと思うこと別に見た、何でも相談できる場所.....	420
図 193. 身近にあるといいと思うこと別に見た、子どもの居場所の利用有無.....	422
図 194. 身近にあるといいと思うこと別に見た、本当に困ったときや悩みがあるときの相談相手・相談先	424